

博士学位論文

内容の要旨

および

審査の結果の要旨

【第20号】

2012

日本社会事業大学

大学院社会福祉学研究科

目 次

[課程博士]

学位記番号	学位の種類	氏 名	論文題目
甲第 47 号	博士 (社会福祉学)	山口 美香	老いの超越の質的意味に関する研究 －新しい分析法 TAE を用いて TAE-based analysis of qualitative research data

氏名	山口 美香
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 47 号
学位記授与の日付	平成 24 年 9 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	老いの超越の質的意味に関する研究 －新しい分析法 TAE を用いて－
論文審査委員	審査委員長 今井 幸充 審査委員 阿部 實 審査委員 中島 健一 審査委員 児玉 桂子 審査委員 後藤 隆

【論文内容の構成及び要旨】

老いの超越の質的意味に関する研究
—新しい分析法 TAE を用いて—

山口美香

概要

本研究は、生涯発達の観点から老年期の内的発達を高齢者の老いや死の捉え方に着目して考察を行なった。

第1章では先行研究から問題の意義を述べた。第2章で本研究のテーマに接近するためには現象学的アプローチによる手法を用いる意義を述べた。第3章では老いの超越を捉える上で抜け落ちる点を明らかにするため量的調査を実施した。第4章で本研究の本調査である質的調査研究において老いの超越の質的意味を捉え第5章で支援策と考察を行なった。

第1章 研究の背景・目的

近年、高齢化率は伸び続け、2055年には国民の2.5人に1人が65歳以上の高齢者になると予想されている。「老い」をネガティブに捉える事が一般的であるが、「老い」をもっとポジティブに捉えていく必要がある。この課題にいかに取り組むかが、今後高齢化社会に向かう共通のテーマであると考えられる。

それには、衰えと死に直面する中で、人間がいか生きるかの意味について考えていくことが必要とされる。そこで筆者は、高齢化社会における「老いの受容」について、老年期にある人たちの「老いや死の捉え方」を通して考察し、人間の「幸福の意味」を解明していきたいと考えた。

近代の若者文化の中で「老い」というものは、一般的にはネガティブに捉えがちであるが今回、筆者は本研究を通じて「老い」を長寿社会におけるポジティブなテーマとして再考していきたい。

本研究は、老いをネガティブに捉える事が一般的であるが、老いをもっとポジティブに捉えていく必要があるとの視点に立ち、加齢という現象の老いの本質を探り、それに起因する高齢者の心理的適応の発達の機構を推察し支援策を検討する事が目的である。

第2章 本研究で採用した方法

本研究は、一般的にネガティブに捉えられがちな衰退期や喪失期である高齢期をもっとポジティブなものに再考していくために生涯発達の観点に着目し高齢者が老いや死をどのように捉えているかの捉え方に着目した。先行研究からエリクソンのライフサイクル論の第8段階の自我の統合対絶望のネガティブ側である絶望から捉え第9段階にトーンスタンの老いの超越の概念を捉え第8段階から第9段階の移行期の意識の流れを捉えるべく既存の尺度から抜け落ちている点を明らかにするためまず調査研究を実施し、そこで捉えた要因の質的意味を現象学的アプローチによる質的研究によってより詳細に捉えていく事を行なった。

第3章 アンケート調査による定量的研究

(1) データ収集の方法

予備調査として、山口（2008）で実施した高齢者8名に対するインタビューをもとに、統合感尺度に関わる43問の質問項目を作成した。これにエリクソンのライフサイクル尺度のうち、高齢者の発達段階にあたる7段階、8段階の計16問から中高年向けの6問を除いた10問を加え、53項目の質問紙調査を作成し、65歳以上の高齢者167人に実施した。因子分析をおこなった結果、35項目からなる3因子構造が見出された。3因子は、「役割喪失、老いの受容、前向き」と命名した。インタビューガイドは、この3因子と、トーンスタンのGerotoranscendence尺度の「宇宙、一貫性、孤独」の3次元に相関関係が見られたことからそれらを代表する質問を、それぞれ作り、それに加えて、聞きにくいことを聞くためのつなぎの質問を加え、10問からなるインタビューガイドを以下の通り作成した。

【インタビューガイド】

- 1 現在生活の中で楽しみにしている事は何ですか？
(楽しんで取り組んでおられる事はなんですか) 生きがい (前向きな体験について)
- 2 その事は以前からずっとやっていた事ですか
以前はやっていたけど今はやっていない事がありますか→ある→なぜ辞めてしまわれたのですか
以前はやっていたけど今はやっていない事がありますか →ない
- 3 自然とのふれあいに心地よさを感じますか(自然、つながり等) 一体感を感じることもあるか
- 4 人生には何か一貫した意味があるように感じられますか
- 5 家族や友人と過ごす時間はありますか？
- 6 家族の中や地域の中でのご自身の役割についてどのように感じていますか
- 7 体力の衰えを感じますか？どのように感じていますか？
- 8 一人、物思いに更ける時間をどのように感じていますか？
- 9 (死に関して) 最後は土に帰るのだと思われませんか？その事について不安はありますか？
- 10 今はどのような状態ですか？どのような環境だったら良いと思われませんか？

(2) 質的調査に向けた説明概念の検討

質的調査研究に実施するにあたって先行研究から説明概念を捉える必要があり、先行研究からトーンスタンの捉えた老いの超越尺度と山口（2009）で作成した統合感尺度の因子項目を文脈(概念パターン)で捉え直し再度検討した。結果、統合感尺度の構成因子の中にプラスとマイナスを側面が検討された。ゆえに因子項目名を検討し老いの超越の移行期の要因として「諦観、受容、達観」を見出した。さらに説明概念として「意欲、習慣、絆、寂寥、喪失、恐怖、回顧」の計10個の説明概念を抽出した。

第4章 現象分析による定性的研究

インタビューガイドをもとに、インタビューをおこなった。インタビューの属性は以下のとおりである。

(1) インタビュイの属性

関東地区在住の65歳以上の高齢者を対象とした。

インタビューは、インタビュアーの自宅もしくはインタビュイの自宅または施設で、約2時間弱にわた

っておこなった。インタビューは録音した。その後、インタビュアーは、録音資料の文字起こしをおこなった。

(2) 分析方法

TAE (Thinking At the Edge) は、「何か言葉にしようとするのだが最初はぼんやりとした『からだの感覚』としてだけ浮かんでくるものを、新しいタームを用いてはっきりと表すための系統だった方法」(「TAE 序文」)である。このからだの感覚をフォーカシングではフェルトセンス (Felt Sence) と呼んでおり近年、ジェンドリンが暗在的理解 (Implicit Understanding: IU) と呼ぶ感覚である。(Gendlin, E.T. 2009)。TAE は論理形式と非論理 (感覚) を行き来する中で通常概念に分割できない新しい概念パターンに注意を向けそこから新しい意味と言語表現を産み出していく系統立った方法である。現象学の流れを汲む哲学者でもあり、心理臨床家でもあるユージン・ジェンドリンが、夫人のメアリー・ヘンドリクスと共同開発した。(Gendlin & Hendricks, 2004)。この手法を用いて内的な構造を可視化することを行なった。

第5章 結果と考察

50人の高齢者に老いや死の捉え方をインタビュー調査から捉え、量的調査で抽出した10個の説明概念でカテゴリーに分類した。結果際立った特徴が事例#14に見られ老いの超越の例として新しい分析手法・TAEで詳細に分析し仮説モデルを生成した。

このモデルは家族と一緒に生活をおくる中で育んできた清い精神が老いの超越のゴールと設定した「澄む・あきらむ」であることが示唆された。祖母や母親の「清い姿を見ること、知ること、#14自身も「清く」なれる。この事は他者や他のものを介した状態が、自己の存在の意味を「諦らむ」から確信や意志の「明らむ」に変化させ信念や生き様として「個」つまり内的成長へと向かうパターンだと示唆される。

一方関わる者が「澄む」を捉え「尊敬の気持ち」がなければ、相互の対話による了解が作用しなければ「澄む・あきらむ」は捉えられない事が考察できる。

関わる者が当事者の状態を捉えて敬意を抱き、それが当事者に伝わるので明らかな意志や確信を抱き、その時の意識状態が「澄む・あきらむ」であると捉えられる。

(1) 本研究の意義

本研究では現象学的アプローチによるモデルの構築を試みた。結果、これまで「老い」とは一般的にネガティブに捉えられていたが本研究を通じて老いや死の新たな価値の意味が捉えられた。今後もこのような対話による関わりを通じて表現することで老年期の発達期のポジティブな可能性が見出される可能性が示唆された。また関わる者が関心を持って聴くことで漸次的な発達が双方に示唆された。

(2) 今後の課題

今後も関係性による個別的な対話を通じて関わる事で老年期の新たな価値の意味を創造し、量的調査で検証していくことが今後の課題である。また個人の意思決定が尊重されかつその人らしさが尊重される支援のあり方を検討し理論化していく事が今後の課題である。

<文献>

Erikson E.H.,(1950). *Childhood and society*. New York:W.W.Norton(エリクソン,E.H.仁科弥生訳(1977-1980)幼児期と社会
1. 2 みすず書房

Gendlin&Hendricks,M.N.(2004) *Thinking At the Edge*(TAE)steps.The folio,19(1),pp12-24

Gendlin,E.T(2009) *What first and third person processes really are*.Journal of Consciousness Sthdies,
16(10-12),pp332-362

Tornstam, L.(2005). *Gerotranscendence*:a developmental theory of positive aging. New York:Springer.

Abstract: TAE-based analysis of qualitative research data

A TAE-BASED QUALITATIVE STUDY of ACCEPTANCE OF AGING AND DEATH FOR AGED JAPANESE PEOPLE

Yoshika YAMAGUCHI

Introduction :

Recently the rate of aging has continued to increase, and it is estimated that one out of every 2.5 citizens will be 65 years old or older in 2055. "Aging" is generally considered as a negative, but it's time to address this topic in a more positive perspective. It is necessary to think about the meaning of life as human beings decline and face death. How to deal with the matter of the aging society is something that everyone must consider.

Method of Data Analysis

The interview data was qualitatively analyzed so as to get an understanding of the interviewee's subjective well-being. The method employed is a theory building method TAE (Thinking At the Edge; Gendlin & Hendricks, 2004). For a researcher engaged in a specific field over a period of years, TAE is useful for interpreting research data by focusing on a specific issue arising in the course of the research as a research question. TAE Steps help the researcher to articulate some understanding of the data to be analyzed (called a felt sense) while staying with the data. With this 'understanding' in mind, the researcher can address the whole of the data including interviews and observations without losing its intricacies. This approach is very useful for grasping the subjective dimension of the individual subject.

Methods:

This study applied a TAE-based qualitative approach to assess for aging and death Japanese, with the focus on 50 elderly subjects.

A scale of integration was prepared based on Yamaguchi's qualitative study (2009) and the element of the scale was "resigned acceptance with a philosophic view." Both positive and negative aspects were found in "resigned acceptance." A qualitative study is limited in its grasp of the meaning of "resigned acceptance," and therefore a way of thinking of TAE was applied to this study.

Discussion :

As a result, the process identified in the meaning of resigned acceptance was to alter from "resigned acceptance of the situation, to a clear state of mind, and to Sumu-Akiramamu.

As a qualitative meaning of resigned acceptance, resignation was grasped to change to resigned

acceptance. The process repeats resignation, becoming a clear state of mind, and acceptance of the situation as it is, and finally, when one faces death, the process changes to “Sumu-Akiramamu (achieving a clear state of mind and accepting the situation as it is).”

It was suggested that the meaning of resignation is emotional experiences (change when feeling hardship) and the meaning of becoming a clear state of mind is that one’s will or conviction becomes clear. One example of gerotranscendence was shown as a process in which one’s mind changes from resignation to acceptance of the situation as it is (reasonable); this process is repeated, and finally when one faces death one reaches “Sumu-Akiramamu.”

Conclusion:

Current types of support provided for the aged regard them as little children, offering the playing of paper balloon volleyball or paper folding. In the future, however, support will also have to consider aspects based on their empirical intelligence. This study suggests that there is a possibility of creating a new and more enriched image of aged people, by creating a means by which they are able to display the wisdom of wise and experienced persons and that their supporters will inherit this wisdom, resulting in the gradually broadening development of both parties.

Key Word: gerotranscendence, feltsense, TAE

【審査結果の要旨】

I 論文審査の手続き及び経過

1 審査手続きと審査委員の構成

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び課程博士論文審査委員会内規に基づき、第1次審査と第2次審査から成り立っている。

審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員5名が担当した。5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	今井 幸充	高齢者保健福祉、精神医学、認知症ケア
審査委員	阿部 實	公的扶助論、福祉計画論
審査委員	中島 健一	高齢者福祉論、心理学
審査委員	児玉 桂子	高齢者ケア環境、施設環境づくり支援
審査委員	後藤 隆	社会調査法、社会調査史

2 審査の経過

2012年5月31日までに提出された第3次予備審査博士論文について5名の審査委員がそれぞれ精読し、6月30日の公開口述試験を受けて、各審査委員の指摘事項を審査委員長がとりまとめ、8月2日及び委員の再指摘がなされた場合には8月20日までの修正を認め、審査委員会は、修正された論文の提出を受けて審査を行い、5名の審査委員が「第3次予備審査評価表（個別表）」を提出し、審査委員長が「第3次予備審査評価表（総括表）」としてとりまとめ、第3次予備審査の評価を全員が合格とし、審査委員会においての合格が了承された。

次いで、9月7日までに最終審査申請論文が提出され、審査委員会は、海外文献の引用及び英語での学会発表の実績や社会福祉領域の知識が十分であると認め、最終審査での口述試験を行う必要はないと判定した。これらをふまえ、審査委員5名全員連名による「博士論文最終審査及び最終試験結果報告書」が作成され、2012年9月20日の社会福祉学研究科委員会に審査結果を提案し、了承・議決を得た。

日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科は、上記の手続きを経て、2012年9月27日に、山口美香に対し、「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

3 審査の内容

第3次予備審査では、①研究目的の明確さと重要性、②研究方法、分析方法、論述の適切さ、③研究結果のオリジナリティと社会的意義、④その他の4項目ごとに評価がなされた。最終審査では、英語力・社会福祉の基礎知識等を含めた社会福祉学としての総合評価がなされた。

【審査委員指摘事項の要旨】

①研究目的の明確さと重要性

○研究目的の記載内容が不明確で日本語として理解しにくい箇所があるので対応すること。

○本研究は老年社会福祉学の論文としての意義や先駆性について示すこと。

②研究方法、分析方法、論述の適切さ、倫理的配慮

○TAE 分析の源流と思われる現象学の志向性など、TAE の出自が歴史的に追跡されていないため、TAE そのものの理解に難があるので対応すること。

○図の説明や一部方法論の明確さに欠ける箇所があり対応すること。

○潜在共通 1 次元尺度とコトバの相関を測る因子分析法と TAE の接続関係に難があるので対応すること。

③研究結果のオリジナリティと社会的意義

○本研究は、老年学の重要な位置付けとしてこれまでに多くの研究が行われてきた。「老いの超越」について、先行論文を基礎に、TEA 質的分析法を用いて、これまでとは異なる諦観と言う概念を「澄む、あきらむ」とした山口氏のオリジナリティは高く評価するが、この博士論文が高齢者福祉分野でどのような影響を持つかの論説が希薄なために、物足りなさを感じた。しかし、本研究は高齢者の死生観やそこまでの葛藤、諦観に到達するまでの力動が見事に表現されていることから、今後の高齢者福祉の分野でも貴重な論文となる事を期待できる。

(第 3 次予備審査)

【総合評価】

山口論文は、高齢者の「老いと死」に対する内界の体験過程を、TAE 法による質的分析から、「老いの超越」を詰まるところ「澄む・あきらむ」と可視化したことに価値を認める。本研究は、TAE 法による質的分析を主体に「老いの超越」の理論展開を実施していくなかで、その客観性を担保するために過去の理論法を丁寧に検証しながら独自の理論構築を行った手法が評価され、全員が合格と評価し第 3 次予備審査を合格とする。

なお、「澄む・あきらむ」の結論に至る展開の曖昧さについて指摘があり、多少の不全感を残しているが、これらの指摘は今後研究者として取り組む課題であるとされている。

① 研究目的の明確さと重要性

指摘事項への対応がなされ、本研究の目的の明確さとその重要性について認めることができ、今後の老年学や高齢者福祉分野での「老いの超越」に関する理論展開に一石を投じた教務部会研究と評価された。

② 研究方法、分析方法、論述の適切さ

難解な TEA 分析法に対する本研究での重要な指摘に対応し、博士論文として整理されていたと評価された。

③ 研究結果のオリジナリティと社会的意義

老年学分野で多くの研究が行われてきた「老いの超越」について、TAE 質的分析法を用い、傍観の概念をこれまでとは異なる「澄む、あきらむ」とし、新たな「老いの超越」の可視化に成功した論文で

あり、その社会的意義を認めるものである。

(最終審査評価)

山口論文は老年学分野で研究がなされてきた「老いの超越」の構造概念を質的分析法から可視化することを目的にした研究であり、これまでの傍観と言う概念とは異なる「澄む・あきらむ」の結論に至った過程を論述したことに研究能力が高く評価された。また社会福祉に関する見識及び英語能力について社会福祉学博士の基準を十分満たしていると評価し、また十分な知識を有していると認め、博士（社会福祉学）に値するものと審査委員全員が一致して評価した。



博士学位論文
内容の要旨および審査の結果の要旨

2012年12月

日本社会事業大学
〒204-8555 東京都清瀬市竹丘 3-1-30
Tel : 042(496)3105 (大学院教務課)
Fax : 042(496)3101
